

# 平成16年度香小研国語部会研究テーマ

香川県小学校教育研究会国語部会

## 1 平成16年度の研究テーマについて

### 生きて働く言語の力を育む国語科学習(3年次)

言語の力の見極めとその指導・評価の在り方を求めて

急速な情報化が進む時代において、もはや言語だけの情報の遣り取りを主とした「言語コミュニケーション」は少なくなってきた。私たちは、映像と言語を併せ持った情報を受信し、生産・発信しているのである。また、インターネット等のメディアの発達により、莫大な情報が瞬時に飛び込んでくる時代でもある。さらには、「国際社会に通用する表現者の育成」や「日本語を学習する外国人の急激な増加」等、進む国際化にも目を向けなければならない。

このことは、子どもたちの実生活にも大きな影響を及ぼしている。例えば、言語を一切用いずに買い物ができる時代となり、「言語コミュニケーション」の場が減少してきている。昔の子どもたちの言語生活とは違い、言語生活の重要な部分が、情報生活の中に吸収されてしまっている傾向が見られるのである。このような社会の変化に対応する言語の力の育成が、今、求められているのである。

一方、言葉によって人々は思考し、判断し、想像を膨らませている。そして、個性や人格を形成していくのである。また、言葉によって文化を創り出し、それを伝えていくのである。このような言語の力を育成することは、言語教育として「不易」な部分である。

今、求められている「生きて働く言語の力」とは、この両面をとらえたものでなくてはならない。言語の力を、子どもの生活にどのように生きて働くのかといった視点から見直して具体的に、系統的に設定し、その力を培うために、どのような指導をしていくべきかを考えていかなければならないのである。

そこで、香川県小学校教育研究会国語部会では、平成14年度から3年間の継続研究として上記の研究テーマを設定したのである。

平成14年度は、サブテーマを「基礎・基本の力とその指導の在り方を求めて」として研究を進めてきた。夏季研修会においては、各郡市の研究の視点から3つの領域における基礎・基本の力を具体的に、系統的に設定し、言語活動研究を中核とした単元設定及び1時間の支援や評価の在り方についての提案がなされ、その提案をめぐって討論を深めていくことができた。また、「パネルディスカッション」で培うべき言語の力とその指導の在り方も提案された。

平成15年度は、サブテーマを「言語の力の見極めとその指導の在り方を求めて」とした。これは、子どもに身に付けさせるべき言語の力を、教師が的確に設定して指導にあたる重要性を訴えるとともに、「基礎・基本を徹底する学び・学習指導要領の示す内容を超えた学び」にも対応することを意図したからである。

また、平成15年度は、第21回四国国語教育研究大会が、小豆郡内海町立星城小学校を会場校として開催された。これに先だって、夏期研修会においては、小豆郡の理論並びに、星城小学校の実践が提案され、四国大会当日の指導案検討も行われた。大会当日は、四国各県から約350人の参加者が、壺井栄ゆかりの地に集結した。星城小学校は、常時活動、研究授業を通して、小豆郡は、研究発表を通して、「思いや考えを豊かに伝え合う力の育成」について提案し、参加者からの高い評価を得ることができた。また、各郡市を代表して6名の先生方が、それぞれの理論を具体的に提案し、参加者のニーズに十分応えることができた。

県の研究テーマ「生きて働く言語の力を育む国語科学習 言語の力<sup>はく</sup>の見極めとその指導の在り方を求めて」の具現化を図るために、研究内容（横系）である「目標レベル・単元レベル・指導レベル」を受けて、各郡市の視点（縦系）から紡いでいくことができたと考えられる。

具体的には、小豆郡の研究である「豊かに伝え合う力」の3視点からの捉えによる「目標レベル」の具体化、「単元の型・展開論」「少人数学習の類型」による「指導レベル」の類型化、そして、「言葉の力が生まれ・有効性を味わい・新たな課題が生まれる」の場の設定による「学習指導レベル」の具現化が挙げられる。

さらに、四国大会では、星城小学校は「常時活動」の提案も行った。大会参加者の反応からも、これからの国語科学習を考えるにおいて、「朝の活動」等の在り方、トピック単元の開発等の必要性も浮かび上がってきた。

一方、文部科学省は、昨年12月、学習指導要領の一部改正を行った。ここでは、「学習指導要領の基準性を踏まえた指導の一層の充実」という視点から、学習指導要領に示していない内容を加えて指導することができることを明確にした。また、「個に応じた指導の一層の充実」という視点からは、習熟の程度や子どもの興味・関心等に応じた課題学習、補足的・発展的な学習活動の導入をし、個に応じた指導の充実を図ることが示された。

このような経緯から、平成16年度の研究の基本方針を以下のとおりとする。

研究テーマについては、3年間の継続研究を計画（3年次は「評価の在り方」についても研究する計画）していたこと、四国大会の成果と課題からも、現在の研究を継続していく価値が見いだせたことから、継続研究としたい。

平成15年度は、研究内容としては、「目標レベル」、「単元レベル」、「指導レベル」であったが、最終年度としては「評価の在り方」の研究にも踏み入れたいと考え、より意識化を図るという目的で「目標レベル」、「単元レベル」、「学習指導・評価レベル」としたい。

目標レベルとしては、発展的な学習も視野に入れ、学年、単元での具体的目標をさらに明確にしたい。

教材開発と領域重点、領域関連等の単元の展開の視点も明確にしていきたい。

県下でも、国語科における「少人数指導」がかなり広がってきている。ぜひ、「個に応じた指導の充実」という視点からも、積極的に「少人数指導」の提案を行いたい。

常時活動（朝学習等）や、言葉に対する関心を高めたり、言語技術を習得したりする等のトピック単元の開発についても、その情報を交換したい。

## 2 研究内容

研究テーマ

生きて働く言語の力を <sup>はぐく</sup> 育む国語科学習  
言語の力の見極めとその指導・評価の在り方を求めて

日常生活に

情報化・国際化の社会に

人間形成に

個性化に

自己形成・社会生活の向上に

文化の継承・発展に

目標レベル

具体的・系統的な言語の力の設定

「生きて働く言語の力」としての具体的・系統的なとらえ直し  
学習指導要領に示されている指導事項をより具体的にとらえる。そして、  
低学年・中学年・高学年の系統性を考慮した目標を設定する。

3つの領域間の目標の関連性に着目する

領域間にまたがる関連指導可能な具体的・系統的な目標を設定する。

基礎・基本の力，学習指導要領を超える力の見極め

どの子どもにも保障しなければならない基礎・基本の言語の力と，それを超  
えたさらに高い言語の力を具体的・系統的に設定する。

単元レベル

目標レベルを受けた言語活動研究・言語活動配列研究・言語活動展開研究

言語活動における子どもの実態と育成する言語の力の分析

ある言語活動を展開することで，子どもたちは教材をどう受けとめ，ど  
のような言語の力を，どのように身に付けていくのかを明らかにする。

学年の系統性を重視した言語活動配列の視点研究

同一，または同系列の言語活動の発展性と培いたい力との関係は何かを  
明らかにする。

領域間の関連，言語の力の育成のための言語活動展開の研究

領域間の関連を図る単元展開とはどうあればよいのか，1単元の言語活  
動の展開において，ある言語の力を習熟していくまでの単元展開とはいかに  
あるべきかを明らかにする。

個の力を最大限に高める「少人数指導」の研究

習熟の程度に応じた少人数指導・子どもの興味・関心に応じた少人数指  
導はどうあるべきかを，実践を基にその方法や効果を検討していく。

学習指導・  
評価レベル

目標レベル・単元レベルを受けたきめ細かな支援・評価の在り方

子どもの課題意識からの指導内容・学習活動の設定

コミュニケーション不成立の場面を取りあげて，その解決のためには，  
どうすればよいのかを考えていく等，子どもの課題意識・目的意識を大切  
にした活動を設定する。

言語の力が明確になり，その有効性が確認され，整理される支援の在り方

言語の力の有効性を実感できる活動を組み，活用・転移する場を設定す  
る等，教師が培いたい力と子どもが身に付けていこうとする力が一致し，  
子どもたちがその言語の力を確実に身に付けることができるようにする。

個に応じた言語の力を育成する評価の在り方

単元の評価規準及び，学習状況の判断の基準，そのための方法を明確に  
した評価計画を作成し，一人一人を確実に評価し，支援へと生かしていく。

常時活動・トピック単元の開発

朝活動の在り方，授業におけるトピック単元の開発を行い実践を交流する。

### 3 研究方法

各都市がそれぞれの視点をもって研究し，以下においてその成果と課題を交流し，さらに研究を深めていく。

平成16年度の夏季研修会

日時 平成16年7月29日(木) 9:00～16:00

場所 ミューズホール

研究冊子「国語科教育40号」

平成17年2月上旬発行予定